

江吏部集試注 (十四)

木戸裕子

(承前)(十三)は『鹿児島県立短期大学紀要』人文・社会科学篇第五十五号に掲載している。

凡例

- 一、底本は群書類従本を用い、後述の諸本により適宜異同を挙げた。
- 一、校異では、逐一の異同を挙げるのではなく、本文解釈に関わるものだけを記した。したがって、異体字については挙げていない。
- 一、校異に用いた諸本と略号は次の通りである。

- 内閣文庫(旧浅草文庫)本(内) 山口県立図書館本(山)
陽明文庫本(陽) 祐徳稲荷本(祐)
静嘉堂文庫本(静) 神宮文庫本(神)
国会図書館本(国) 無窮会図書館本(無)
東大図書館(E45 656)本(東A)
東大図書館(旧南葵文庫)本(東B) 岡山大図書館本(岡)
島原松平文庫本(島) 東北大図書館本(東北)
京大図書館本(京) 多和文庫本(多)

賀茂別雷文庫本(賀)

名古屋市立鶴舞中央図書館本(鶴)

本朝文粹(新日本古典文学大系)本(粹) 本朝麗藻(校本本朝麗藻)本(麗)

一、本文の漢字はできるだけ現行の字体に統一した。ただし、次の漢字は

底本の字体を尊重した。

煙・烟 花・華 叢・藂 窓・牕など。

一、割注など小書の部分は「」に入れて示した。

一、訓読文は必ずしも平安時代の訓みによるものではないが、古辞書類を参考にした。

付記 本稿を作成するにあたっては、東京大学史料編纂所データベース、北京大学全唐詩電子検索系統、台湾中央研究院漢籍電子文獻資料庫を利用させていただいた。学恩に感謝いたします。

※ 前稿の補遺及び訂正

後藤昭雄氏から御教示をいただきました。心よりお礼申し上げます、補遺・訂正としてあげさせていただきます。

三十七 晩冬同賦池氷如对鏡

五句目訓読 凝りては看る 蓮府千年の影

六句目訓読 結びては借る 楊州百練の名

五句目通釈 池の水が凍って(鏡のように)左大臣道長様の千歳のご繁

栄の様子を映し

六句目通釈 凝結した池は、あの唐帝に献ぜられた楊州百練鏡にも劣らない鏡のよう

【製作年代】

長徳三年十二月十二日。「夕詣左府。依作文事有召也。題池氷如対鏡（以清為韻）、序者慶滋為政」へ「権記」長徳三年十二月十二日条

【語釈】

◎自慙Ⅱ第七句、第八句は「白氏文集」一三四〇「白髮」「最憎明鏡裏黒白半頭時」の詩意によるか。

【参考】

本詩の頷聯、頸聯が「類題古詩」「五十一対」部に載る。

318 池氷如対鏡

また、319には同題の善滋為政の作があり、その三句目、四句目は匡衡詩の頸聯と同様、白居易の新楽符「百鍊鏡」の影響が見える。

□□開匣堅封処 猶未安台冷合程

瓊粉潭心寒雪点 金膏水面夕嵐瑩

三十八 早夏観曝布泉

転句 誤：堅 正：豎

訓読 雲を穿ち倒しまに瀉げば寒声豎つ

三十九 七言 夏日陪藤亜相城北山莊同賦淡交唯対水詩一首

詩序四行目 誤：左親衛亜相 正：左親衛亜将
詩序二二行目訓読 其れ芬芳なるも狂風に当たりて以て早く落つるを恨み

【校異】

三行目 亜将Ⅰ亜相（底本、諸本ニヨツテ改ム）

【語釈】

◎淡交唯対水Ⅱ出典は「白氏文集」二二七八「問秋光」第九句。「淡交唯対水老伴無如鶴」

◎右駕部藤郎中Ⅱ藤原実方。「廿九日、壬午……暁更差右馬頭実方」へ「小右記」永延二年十月二十九日条

◎左武衛藤神将Ⅱ藤原通任。「参議 従四位下 藤原通任……同（永延）三・三・四左兵衛佐」へ「公卿補任」寛弘八年条

※ 本稿では巻上第四十番から四十三番までの詩及び詩序を取り扱う。

四十 七言夏日陪左相府書閣同賦水樹多佳趣応教一首（以深為韻并序）

洛陽城中有一勝境

本是丞相之甲第

重開東閣之荣名

或為母儀之仙居

洛陽城中に一勝境有り

本是れ丞相の甲第にして

重ねて東閣の荣名を開く

或るは母儀の仙居と為り

屢迴天輿之臨幸

爰我相府

感其形概之靈奇

增以水樹之佳趣

石瀨巖灣風調彈箏峽之曲

春花秋葉雨染錦繡谷之文

至如彼

千秋之岸鑿以無私

万年之枝攀以有節

向蘋藻兮觀魚

猶垂涓陽之釣

栽梧桐兮待鳳

載轄博陸之車者也

夫

偏事啓沃者

玄元養生之方難求

偏賞煙霞者

綠綬補袞之道易闕

懿矣相府之居此地

朝出則紫宮不遠

屢しば天輿の臨幸を廻らす

爰に我が相府

其の形概の靈奇に感じ

増すに水樹の佳趣を以てす

石瀨巖灣 風は彈箏峽の曲を調べ

春花秋葉 雨は錦繡谷の文を染む

彼の

千秋の岸 鑿るに以て私無く

万年の枝 攀づるに以て節有るが

如きに至りては

蘋藻に向かひて魚を觀

猶ほ涓陽の釣を垂れ

梧桐を栽えて鳳を待ち

載ち博陸の車に轄する者なり

夫れ

偏に啓沃を事とする者は

玄元養生の方求め難く

偏に煙霞を賞づる者は

綠綬補袞の道闕き易し

懿いかな 相府の此の地に居るや

朝に出づれば 則ち紫宮遠からず

暮歸亦青山在傍

鑿翠池而泛舟

是象岳之不忘濟川也

締金埒而閑馬

是文事之不捨武備也

氣韻之美不光古乎

于時

蕤賓暇日艾人後朝

卿相四五輩風月數十人

酌道徳而為酒

豈只越王鳥之頻飛

味札樂而為肴

豈只吳江魚之細切

匡衡

蓬壺踏雲葵心向日

雖才非一驥

心慙賢相之廻顧

而官有三龜

首戴聖代之重恩

幸屬盛遊何不記錄云爾

暮れに帰れば 亦青山傍らに在り

翠池を鑿ちて 舟を泛かぶ

是れ象岳の濟川を忘れざればなり

金埒を締めて 馬を閑かにす

是れ文事の武備を捨てざればなり

氣韻の美 古を光らさざらんや

時に

蕤賓の暇日 艾人の後朝

卿相四五輩 風月數十人

道徳を酌みて酒と為す

豈に只 越王鳥の頻りに飛ぶのみ

ならんや

札樂を味はひて肴と為す

豈に只 吳江魚の細切のみならんや

匡衡

蓬壺に雲を踏み 葵心 日に向かふ

才は一驥に非ざれば

心は賢相の廻顧に慙つと雖も

而かうして官に三龜有りて

首は聖代の重恩を戴く

幸ひに盛遊に属し 何ぞ記録せざる

と云ふこと爾り

園池佳趣一相尋

園池 佳趣 一たび相ひ尋ぬれば

樹影重々水色深

樹影 重々として水色深し

照藻月瑩方見鏡

藻を照らして月瑩あきらかなり 方に鏡を
見るがごとく

入松風撫自聽琴

松に入りて風撫づれば おのずづから
琴を聴くがごとし

削成曲洛城中石

削り成せり 曲洛城中の石

養得翹材館下林

養ひ得たり 翹材館下の林

動靜飛沈皆計会

動靜 飛沈 皆計会

好憑軒檻快謳吟

好こしとむ 軒檻よに憑りて快く謳吟せん

【校異】

応教一応教詩(神) 甲一高(祐) 開一閨(底本、諸本ニ依リ改ム)

或一式(鳥) 巖一岩(内A) 葉一月(ミセケチシテ葉ト傍書)(祐)

彼一波(鳥) 岸一序(陽、東A、祐、神) 一序(ミセケチシテ岸ト傍書)

(靜) 攀一攀(ミセケチシテ攀ト傍書) 兮一兮(ミセケチシテ兮ト傍書)

(内A) 一兮号(内A) 待一侍(無) 啓沃一沃啓(京) 元一老(ミセ

ケチシテ元ト傍書)(内A) 矣一哉(ミセケチシテ矣ト傍書)(神)

暮一慕(ミセケチシテ暮ト傍書) 内A 在一左(山) 泛一冷(祐) 象一

豕(祐) 一豕(象イト傍書)(神) 一白豕(ミセケチシテ象ト傍書)(靜) 一

白豕(臯カト朱筆傍書)(東A) 一卓豕(本ノママト傍書)(東B) 不

ナシ(東A、B、祐、京) 一ナシ(補入印ヲツケテ不ト傍書)(靜) 古

右(ミセケチシテ古ト傍書)(東A) 乎一手(鳥) 艾一文(ミセケチシテ

艾ト傍書)(靜) 一丈(陽) 一丈(ミセケチシテ艾ト傍書) 一大(京) 一太

(友イト傍書) 一苒(鳥) 一苒(ミセケチシテ艾ト傍書)(内A) 魚一ナ

シ(鳥) 江一王(ミセケチシテ江ト傍書)(東B) 細一納(神、京)

切一劫(ミセケチシテ切ト傍書)(神) 向一而(ミセケチシテ向ト傍書)

(内A) 三一二(一作三ト傍書)(底本、他本ニヨリ改ム) 戴一載(底

本 内A・東A・B・鳥・神ニ依リ改ム) 計一斗(京) 快一快(陽、)

謳一放(底本、無・鳥ニヨリ改ム) 一軀(陽、山、祐、京、神) 一放(ミ

セケチシテ謳ト傍書)(内A) 一謳(ミセケチシテ放ト傍書)(靜)

【押韻】下平声侵韻

○○○○××○× ××○○○××○

×××○○○×× ×○○○○××○

×○○××○○× ××○○○××○

××○○○×× ×○○○××○○

【製作年代】

長保元年五月六日、七日。「五月六日、丁亥。於東対召作文人々作文。中納言、右衛門督、宰相中将等、可然殿上人等来。七日、戊子。早朝講文。題水樹多佳趣。齊名朝臣所出也。韻深字以言朝臣。序匡衡朝臣……」へ「御堂関白記」長保元年五月六日、七日条

【語釈】

◎左相府書閣＝左相府は左大臣。藤原道長のこと。書閣は書物を置いた建物。書齋。ここは「御堂関白記」に見える道長の邸、東三条第の東対。

◎水樹多佳趣＝詩題の典拠未詳。

◎丞相＝大臣。ここは道長の父、入道太政大臣兼家を指す。

◎甲第＝立派な邸宅。「北闕甲第、当道直啓」＝「文選」卷二「西京賦」班固＝「河原院者、昔乃是相府之甲第。今猶為玉輦之景村」＝「本朝文粹」

卷八「秋日於河原院同賦山晴秋望多」藤原惟成＝

◎采名＝采えある名。「司馬孚之賜雲輦 雖比采名於晋朝」＝「本朝文粹」

卷十一「暮秋陪左相府書閣同賦菊潭花未遍」紀齊名＝

◎仙居＝仙人の住まい。転じて院の住まい。ここは一条天皇の母東三条院

詮子の住まいとなったことをいう。「紫宮之東、横街之北、不經幾程、有一仙居。」＝「本朝文粹」卷十「暮春同賦落花乱舞衣各分」字応太上皇製

大江朝綱＝

◎天輿＝天子の乗り物。天皇の輿。

◎臨幸＝行幸に同じ。天皇のお出まし。「今上每春臨幸之地 輦路之草初滋」

「本朝文粹」卷十四「円融院四十九日御願文」菅原輔正＝本詩会以前に

一条天皇が東三条第に行幸したのは永延元年十月十四日、正暦三年四月

二十七日、長徳元年正月二日の三回が確認できる。「日本紀略」この

うち永延元年十月十四日の行幸では詩宴が催され、匡衡も出席している。

「江吏部集」卷下「初冬陪行幸撰政策、同賦葉飛水面紅、応製」

◎靈奇＝玄妙なこと。すばらしいさま「二流涇渭最靈奇 合注交通不是随」

「本朝文粹」卷七「申請重弁定齊名所難学生同時棟詩状」大江匡衡＝

◎石瀬＝はやせ。水が浅く早い流れ。「石瀬兮浅浅 飛龍兮翩翩」＝「楚辞」

「九歌」「湘君」

◎巖灣＝巖にかこまれた灣。

◎彈箏峽之曲＝彈箏峽は甘肅省平涼県の西にある峽の名。水音が箏を奏でる音に似ているためその名が付いた。「安定西隴道、其谷中有彈箏之声。

行人過聞之。謂之彈箏谷」＝「述異記」上＝「昔者延長明主 賜示彈箏之

趣」＝「本朝文粹」卷十四「清慎公奉為村上天皇諷誦文」菅原文時＝「眼

偷瀑布秋泉色 耳仮彈箏曉峽色」＝「本朝無題詩」卷五「秋三首」其一藤

原忠通＝

◎錦繡谷之文＝錦繡谷は廬山にある谷。白居易がその「草堂記」の中で春

訪れるべき所として言及している。「其四傍、耳、目、杖屨可及者、春有

錦繡谷之花、夏有石門澗之雲」＝「白氏文集」一四七二「草堂記」

◎千秋之岸＝「山呼万歳空無識 水号千秋未足要」＝「本朝麗藻」卷下「夏

日陪於員外端尹文亭同賦泉伝万歳声」大江以言＝

◎蘋藻＝水草「発蘋藻以潜魚 豊圃草以毓獸」＝「文選」卷一「西都賦」班

固＝「奠蘋藻於茅藉 則百靈觀其肃色」＝「本朝文粹」卷三「立神祠策文」

三善清行＝

◎渭陽之釣＝渭陽すなわち渭水の北側で釣りをしていた太公望呂尚が周の

文王に見いだされ師父と呼ばれ政治の補佐をした故事。二十九「七言冬

日登天台山即事」の「類周文之遇師父」の語釈参照。

◎梧桐ニあおぎり。鳳凰は梧桐に棲むとされた。「鳳非梧桐不栖、非竹実不食」

〔初学記〕鳥部「鳳」所収「毛詩疏」

「桐の花……唐土にはことごとしき名つきたる鳥のえりてこれにしもゐるらむ、いみじう心ことなり。」

〔枕草子〕木の花は「影漏疎梧桐 色照衰芙蓉」

〔本朝文粹〕卷一「秋夜感懷 敬猷左親衛員外將軍」橋在列

◎博陸之車ニ博陸は前漢の霍光。票騎將軍霍去病の異母弟。武帝が崩じたとき、遺詔によつて博陸侯に封ぜられた。「武帝病、封璽書曰、帝崩發書、

以從事、遺詔、封金日碑為稅侯、上官桀為安陽侯、光為博陸侯」

〔漢書〕「霍光伝」また、漢の宣帝から卓蓋の車を賜つた。「漢宣帝以卓蓋車一乘、

賜大將軍霍光。悉以金具、至夜、車轄上金鳳凰、輒亡去、莫知所之。至

曉乃還。如此非一」

〔統齊諧記〕「世功世徳 何人之遺蹤 去病則是霍將軍博陸之兄 玄成寧非韋丞相之第四之子」

〔本朝文粹〕卷二「答枇杷左大臣辭職表勅」大江朝綱

◎啓沃ニ心を開いて君主の心にそそぐ。君主を導く。「朝夕納誨、以輔台徳……

啓乃心、沃朕心」

〔書経〕説命上「而臣啓沃悔於既往、撰理味方來」

〔本朝文粹〕卷四「同公（入道大相国）重上表」同卷五「為同太政大臣

辭左大臣第二表」大江匡衡

◎玄元養生之方ニ玄元は老子を指す。「知者黙也 寧非玄元氏之文」

〔本朝文粹〕卷一「兎裘賦」兼明親王「夫守庚申者、玄元聖祖之微言也」

〔本朝文粹〕卷十一「冬夜守庚申同賦修竹冬青」藤原篤茂「養生方は、た

たとえば兼明親王の「遠久良養生方」に描かれるような、俗塵を離れた山

莊での生活を念頭に置くか。「任行樂 入坐忘 擯俗地 無何郷 心自得 寿

無疆」

〔本朝文粹〕卷一「遠久良養生方」兼明親王

◎煙霞ニもや、かすみ。

◎緑綬補袞之道ニ緑綬は漢代、貴人の身につけた緑色の印綬。高位のしる

し。「諸国貴人相国皆緑綬」

〔後漢書〕「輿服志」補袞は天子の職を補うこと。袞は天子の服。「袞職有闕 惟仲山甫補之」

〔詩経〕大雅「烝民」

◎懿ニよい「懿乎 四三皇六帝 紫宮高敞 乃心于以知帰」

〔本朝文粹〕卷一「未旦求衣賦」菅原道真

◎紫宮ニ天帝の居所、転じて天子の住まい。宮殿「其宮室也 体象乎天地……

煥若列宿紫宮是環」

〔文選〕卷一「西都賦」班固「爽氣浮丹闕 秋光澹紫宮」

〔全唐詩〕卷一「秋日即目」太宗皇帝「紫宮之東 横街之北 不經幾程 有一仙居」

〔本朝文粹〕卷十「暮春同賦落花乱舞衣」大江朝綱

◎青山ニ青々とした山。俗塵を離れた地。「清晨連轡供樵歌 漸上青山逸興多」

〔本朝麗藻〕卷下「過秋山」具平親王

◎翠池ニみどりの池。翡翠のように澄んだ水色の池。「倚風無力減香時 涵露如啼臥翠池」

〔全唐詩〕卷八八四「殘蓮花」崔櫓

◎象岳ニ大臣の唐名。「寄高象岳 既養杞梓之材」

〔本朝文粹〕卷二「答入道前太政大臣并章奏等表勅」紀齊名

◎濟川川を渡るための舟の楫のように、天子の政の補佐役となること。

「若濟巨川、用汝作舟楫」〔書經〕「説命上」〕「親已非戚里、心何在濟川」

〔本朝文粹〕卷二「答入道前太政大臣并章奏等表勅」紀齊名〕

◎金埒埒は馬場の囲い。豪華な馬場。「濟、好馬射、買地作埒、編錢匝地竟埒。時人号曰金溝。(溝、一作埒)」〔世説〕沙修篇〕「細草開金埒」

流霞泛羽觴」〔全唐詩〕卷四三「安徳山池宴集」李百薬〕

◎氣韻文章の風格。氣品。「蘊思含毫、遊心内運、放言落紙、氣韻天成」

〔南齊書〕「文学伝論」〕「皇子神情朗悟、氣韻凝高」〔本朝文粹〕卷九

「秋日聽第八皇子始説御注孝經」菅原文時〕

◎光古「於戲、千載一遇、不光古乎」〔江吏部集〕卷下「暮春侍宴左丞相

東二条第同賦渡水落花舞」〔本朝文粹〕卷十にも載せる〕

◎蕤賓暇日蕤賓は律の名。陰曆五月の異称。「五行大義」「論律呂」に詳

しい。「仲夏之月、日在東井、昏亢中、且危中。其日丙丁、其帝炎帝、其

神祝融、其虫羽、其音徵、律中蕤賓」〔礼記〕月令〕「蕤賓初日雨油々

細脚如糸水上浮」〔本朝麗藻〕卷上「雨為水上糸」菅原宣義〕

◎艾人後朝艾(よもぎ)で作った人形。陰曆五月五日の朝、よもぎを摘んでそれで人形を作り、軒先や門の上に飾り、邪気を払った。「五月五日、

……採艾以為人、懸門戸上、以禳毒氣」〔荆楚歲時記〕「艾人形相自

蒼生、初出雲溝束帶成」〔菅家文章〕卷四「端午日賦艾人」〕

◎風月詩文を作る人、文人。二「八月十五夜江州野亭對月言志」の風月の語釈参照。

◎越王鳥酒杯。越王鳥は水鳥の名。そのくちばしを酒器としたという。

「越王鳥、状如鳥鳶、而足長口勾、末如冠、可受二升許、以為酒器、極堅緻」〔本草綱目〕「禽部」第四十七「鱖鱸」所引「羅山疏」〕

◎吳江魚晋の張翰が故郷の吳の菰菜蓴羹や鱸魚の膾を恋しく思い、官を辞して帰った故事。美味な食べ物。「齊王竦為大司馬東曹掾、因見秋風起、

乃思吳中菰菜蓴羹鱸魚膾、曰、人生貴得適志、何能羈宦數千里、以要名爵乎。遂命駕而歸」〔晋書〕「文苑張翰伝」〕「攸飲水、思沢沸吳江之波」

〔本朝文粹〕卷三「詳循吏対」大江挙周〕「緑池水高、縮吳江於眼下」

〔本朝文粹〕卷十「初冬過源才子文亭同賦紅葉」源順〕

◎蓬壺踏雲蓬壺は東海中にあるとされた神仙の住む山。蓬萊。転じて宮

中を指す。雲を踏むは昇殿すること。「三壺則海中三山也。一曰方壺、則

方丈也。二曰蓬壺、則蓬萊也。三曰瀛壺、則瀛州也。形如壺器」〔拾遺

記〕高辛〕「聞有蓬壺客、知懷杞梓材」〔白氏文集〕八〇八「酬廬秘書

二十韻」〕「行李札成廻節信、扶桑恩極出蓬壺」〔田氏家集〕卷中「七言

夏夜於鴻臚館餞北客帰郷」〕「輔昭、泝於李門之浪二年、朝恩未及、踏於蓬

壺之雲十日、夜飲既酣」〔本朝文粹〕卷十「春日同賦隔花遙勸酒応太上

皇製」菅原輔昭〕

◎葵心向日日向葵が常に日に向いているように、天子を慕うこと。「葵藿

之傾葉、太陽雖不為之廻光、然終向之者誠也」〔文選〕卷三七「求通親

親表」曹植〕「葵枯猶向日、蓬斷即辞春」〔白氏文集〕一〇〇八「江南

謫居」〕「其苞何橘飽霜、彼摘何葵向陽」〔本朝文粹〕卷一「遠久良養

生方「兼明親王」
「亦猶立松節於繁霜 守葵心於聖日也」
〔本朝文粹〕

卷七「申犯平頭及第并犯蜂腰落第例等狀」
〔紀育名〕

◎一驥ハ驥は千里の馬。俊才を指す。「未遇伯樂、則千載無一驥」
〔文選〕

卷「三国名臣序贊」袁宏「跛鼈雖遲騏驎疾 何妨中路亦相逢」
〔白氏文集〕二五八三「喜与韋左丞同入南省。因叙旧以贈之」
〔騏驎之病也〕

驚馬先之 況驚馬之病乎」
〔本朝文粹〕卷四「為人道前太政大臣辭職並封戸准三宮第三表」
大江匡衡

◎廻顧ハ顧みること。引き立てること。「霜台者吾昔所歴也 忝仰廻顧於驄馬之跡」
〔江吏部集〕卷上「八月十五夜陪員外藤納言書閣同賦月照牖前竹」

◎三龜ハ龜は漢代の龜の形をした印章。転じて官職そのものを指す。「牽糸及元典 解龜在景平」
〔文選〕卷二六「初去郡」謝靈運 匡衡は本詩会が催された長保元年には、文章博士、東宮學士、式部權大輔の三官を兼任していた。

◎重恩ハおもいめぐみ。大きな恩沢。「今天下崩乱、主上蒙塵。吾被重恩、未能清雪国恥」
〔後漢書〕劉虞伝

◎月瑩ハ瑩はあかるいさま。鏡のはつきりともを映すさま。「此人之水鏡也、見之瑩然、若披雲霧觀青天」
〔晋書〕樂廣伝、「世説新語」賞譽「夜半沙上行 月瑩天心明」
〔全唐詩〕卷三八八「月下寄徐希仁」

盧全

◎風撫ハ風が松の梢を吹き抜ける。松風が琴の音に響き合う。「月影臨秋扇

松声入夜琴」
〔李嶠百二十詠〕「風」
「琴の音に峰の松風かよふらし

いづれのをより調べそめけん」
〔齋宮女御集〕五七「野宮にてきんに風

のおとかよふといふだいを」

◎曲洛城中石ハ曲洛は洛水の曲がりくねったところ。

◎翹材館下林ハ翹材館は漢代、平津侯が建てた館の名。天下の才能有る人材を招いた。「平津侯自以布衣為宰相。乃開東閣、營客館、以招天下之士。其一曰欽賢館、以待大賢。次曰翹材館、以待大才。次曰接士館、以待国士」
〔西京雜記〕四「齊名昇僊橋頭 謬題大車肥馬之字 翹材館下 幸容鈍学拙文之身」
〔本朝文粹〕卷八「三月尽日同賦林亭春已晚」
紀育名

◎動静ハ世の中の移り変わり、情勢。「動静治乱之不同、喜怒哀樂之相變」

◎李朝文粹ハ卷三「弁散案对策」秦氏安

◎飛沈ハ浮き沈み「營魄懷茲土、精爽若飛沈」
〔文選〕卷二十四「贈從兄車騎」陸機

◎軒檻ハ欄干、てすり。「憑軒檻以遙望兮、向北風而開襟」
〔文選〕卷十

一「登樓賦」王粲

◎謳吟ハ天子の功德をたたえて歌う。「莫不抃舞乎康衢、謳吟乎聖世」

◎文選ハ卷五「藉田賦」潘岳「秋月朗夜 謳吟之声猶忙」
〔本朝文粹〕

卷十一「奉賀村上天皇四十御算和歌序」藤原後生

【通釈】

都のうちにすばらしい場所がある。

都のうちにすばらしい場所がある。

都のうちにすばらしい場所がある。

都のうちにすばらしい場所がある。

都のうちにすばらしい場所がある。

都のうちにすばらしい場所がある。

都のうちにすばらしい場所がある。

本来ここは先の大匠兼家さまの邸宅で、賢人たちが幾度も集まった。ある時は帝の母君皇太后詮子さまのお住まいとなり、何度も帝のお出ましにあずかった。

こうして我らが左大臣道長さまは、この地の形のすばらしさに感動なさり美しい水辺に茂る木々によつてこの景観をいつそう増そうとなさった。

ここに風が吹けば、岩に囲まれた湾や流れの速い浅瀬では、彼の弾箏峡と同じく水音が箏を奏でているように聞こえ、

雨が降れば、春の花や秋の紅葉は、あの錦繡谷での詩文を思わせる鮮やかさだ。

千年も続くかと思われる岸辺に、水鏡を眺める主人の無私なる心が映り、万年の緑をたたえた枝に、それを折り取る主人の節義があらわれるさまに至っては

この邸の主人が、池の水草の間の魚を眺めては、あの太公望が渭水の北浜で釣りをして周文王に出会った故事を思い

梧桐を栽えて鳳凰の訪れを待ち、漢の霍光が博陸侯となつて宣帝から車を賜つたように関白となつて帝の外戚となることを約束するものである。

そもそも、ひたすら政治の補佐の任にあたる者は、老子の説く奥深い養生の方を求めることがむずかしく、

ひたすら煙霞の景を愛でる者は、高い位に昇つて帝の補佐をする道からは離れてしまひやすい。

すばらしいではないか、左大臣様がこの地にお住まいになるのは。

朝、出かける際には朝廷は遠からず、夕べに帰る際には俗事を離れるための青山がすぐそばにある。(こうして政治と養生を両立できるのだ) また、この地に翠池を作り船を浮かべるのは、大臣として帝を補佐する事を忘れていらつしやらないからだし、

馬場を設けて馬を調教するのは、文官であっても武事をおろそかになさらないからだ。

その風格のすばらしさは古の政治家にも優つているといえよう。

時に、今日は端午の節句の翌日にあたり、五月の暇日である。

この地に公卿四、五人、文人数十人が会し、

珍しい杯で酒を酌み、美味な魚膾を味わうのみならず、道徳を酒とし礼楽を肴とし楽しんだ。

私巨衡は雲を踏むような思いで殿上し、常に帝に誠をささげております。

優れた才の持ち主ではありませんので、心ひそかに左大臣様のご愛顧に対して恥ずかしく思っておりますが、

しかし忝なくも三官を兼任させていただき、聖代のご恩を有り難くいただいております。

幸いにも今日の盛事に参加することができました。

どうして記録せずにはおれましようかと申し上げる次第でございます。

庭園の池のすばらしい趣を尋ねると

池に映る木の陰に水の色はいつそう深く見える

池の中の藻を照らす月の光は鏡を見ているかと思われるほど明るく

松の木立を吹く風の音は琴を奏でているかのようだ

曲がりくねった遣り水の流れは邸内の石を削り磨き

漢の翹材館にも比すべきこの邸の前栽を育てている

世の移りやここに集う人々の浮沈はみな計ったかのようにうまくいっ

ており

私たちは安心して欄干にもたれこの御代をたたえて詩を吟じるので

ある

【参考】

「本朝文粹」巻八「山水」に本詩序を載せる。「本朝麗藻」巻上夏部に同
じ時に作られた藤原齊信、源道済の詩を載せる。

四十一 秋日岸院即事

遠尋古院被秋催

岸上排松牕戸開

灑砌浪紅鋪落葉

透階嵐緑掃寒苔

孤舟棹影穿烟去

晚寺鐘声渡水来

遠く古院を尋ねれば秋催さる

岸上松を排し牕戸開く

砌に灑ぐ浪は紅し落葉を鋪き

階を透る嵐は緑なり寒苔を掃く

孤舟の棹影烟を穿ちて去り

晚寺の鐘声水を渡りて来たる

此地ト隣非俗境

龜山便是小蓬萊

此の地に隣をトするに俗境に非ず

龜山は便ち是れ小蓬萊

【校異】

排一桃(東A) 透一達(島) 晚一脱(内A) ト一下(下歟ト傍書)

【押韻】上平声灰韻

×	○	×	×	×	○	○	×	×	○	○	×	○	○	×	○
×	×	○	×	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○
○	○	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○
×	×	×	○	○	×	×	×	×	×	○	○	×	×	×	○

【語釈】

◎古院||古くからある院。ここは嵯峨院の跡を指すか。「輕如蕃籬之鸚 轉
似古院之蓬」(「本朝文粹」巻一「落葉賦」紀音名)

◎秋催||秋になる。年催で、新しい年が来る、年を取るの意。「不独年催身
亦変 校書郎変作尚書」(「白氏文集」二八五七「和微之任校書郎日過三

郷

◎排松||「寂寞排松榻 爛斑半雪鬚」(「全唐詩」卷八三二「送僧入石霜」

貫休)

◎灑砌||砌は階下の敷き瓦を敷いたところ。ここは遣り水をいうか。「灑砌

飛泉纒有点 拂窗斜竹不成行」(「白氏文集」九七五「香爐峯下新ト山居

草堂初成偶題東壁」(「千載佳句」下「水竹」部にも載せる)

◎透階 階段をめぐる。「白雲当嶺雨 黄葉透階風」(「全唐詩」二七六)

「考功王員外杪秋 憶終南舊居」盧綸

◎棹影 棹の影。「孤舟停棹 常謂仙槎之未別矣」(「本朝文粹」卷一「織女

石賦」菅原文時)

◎晚寺 夕暮れの寺

◎卜隣 住居を定めるために近隣の善し悪しを占うこと。「一昨陪錫杖 卜

鄰南山幽」(「全唐詩」二二八「寄贊上人」杜甫)「林泉卜隣 喧囂隔境」

「本朝文粹」卷十四「宇多院為河原院左大臣没後修諷誦文」紀在昌

◎龜山 京都嵯峨。嵯峨天皇が離宮を営んだほか、兼明親王が、嵯峨野大

井 河畔に山莊を定めて隱遁生活を送った。「余龜山之下、聊卜幽居。欲辭

宮 休身、終老於此」(「本朝文粹」卷一「兔裘賊」兼明親王)

【通釈】

秋の日、岸院において作る即事の詩

都から遠く古くからの院を尋ねると秋の気配が漂う

川岸の松の枝を押しわけ扉を開けると

砌には紅葉が散り敷き 浪までが紅い

階の下の苔を吹く山風は 緑に染まって見える

一艘の舟が霧の中 川を下って見えなくなり

川の向こうから夕暮れを告げる寺の鐘が聞こえてくる

この地を占ってみると俗世から離れた地とわかった

龜山の地はまさに小蓬萊なのであった

【参考】

第五、六句について「袋草紙」上巻「雑談」に、大江以言が匡衡の句をひそかに盗み見て競作した旨の説話を載せる。ただし、以言の詩は現存しない。

某の所の御屏風の詩を、匡衡・以言これを奉る。而して匡衡定めて秀句有る事を、以言深く不審す。生侍と称して匡衡家の女房に会ひて、窃かに語りて云はく、「近日の殿の所為は何事ぞや」と。女房云はく、「常に物を案じ、これを書き付けらるるの外は他事なし」と云々。以言云はく、「件の草もし破り棄てらるるあらば、取りて給ふべし」と。後日に女房、草案の破り棄てたるを与ふ。以言これを読み見て見るに、纒かに一句有り。「晚寺の鐘声水を渡りて來たる」。以言上の句を作ると云々。「寒谿の樹色は霜を経て変じ」。これを以てかの屏風の詩の中に入る。また匡衡の上の句に云はく、「孤舟の棹影は烟を穿ちて去り」と云々。同じく件の屏風の詩となすなり。世以て作り合はするの由を存じ、以言の上の句の勝れりと作すの由と云々。(「袋草紙」上巻)

四十二 夏夜同賦池台即事応教

常在李門員外職

常に李門員外の職に在り

久陪蓮府善根場

久しく蓮府善根の場に陪す

孫弘閣月集賢士

孫弘の閣月賢士を集め

呂望家風開后房

呂望の家風后房を開く

応は法華薰入力

応に是れ法華薰人の力にして

弥令累葉照臨光

弥よ累葉をして照臨の光たらしむべし

誦詩譚礼宛昭教

詩を誦し礼を譚へ昭教に宛つれば

心足漸忘鬢上霜

心足りて漸く忘る鬢上の霜

〔寛弘三年秋所言不誤故献此句〕

〔寛弘三年秋言ふ所誤らず故に此の句を献す〕

【校異】

善一姜（底本、諸本ニ依リ改ム） 弥一弘（底本、諸本ニ依リ改ム） 令一

金（鳥） 譚礼一礼（祐）一礼（礼ノ上ニ補入印アリ）（神）一礼（礼ノ下

ニ補入印リ）（山）一談礼（内A、鳥） 宛一死（内A、陽、祐、山、京）

死（ミセケチシテ宛ト傍書）（静）一死（充歟ト傍書）一宛（死歟ト右側ニ

傍書、ソレヲ朱筆デ消シ左側ニ玄カト朱筆傍書）（東A） 昭一照（祐、山）

【押韻】下平声陽韻

○××○×××

×○○××○○

○○×××○○

×○×○○×○

○××○×○○×

○○×○×○○

×○○××○○

○×○○××○

【制作年代】

寛弘五年五月一日。「五月一日、庚申、……守庚申、有作文、夏夜池台即

事」〔御堂関白記〕寛弘五年五月一日条

【語釈】

◎池台〓池のそばの建物。道長の邸東三条第の釣殿。「池台晴雪 冠蓋暮和

雲」〔白氏文集〕六一〇「与諸同年賀座主侍郎新拜太常。同宴蕭尚書亭

子」

◎李門員外職〓李門は式部省の唐名。員外職は権官。匡衡が式部権大輔に

補せられたのは長徳四年（九九八）。その後寛弘三年（一〇〇六）正月に

息挙周を式部丞にするために自身の権大輔の職を辞す。翌々年寛弘五年

（一〇〇八）再任。同七年十二月式部大輔に転ずる。〔中古歌仙三十六

人伝〕。

◎蓮府〓大臣の屋敷。転じて大臣本人をいう。本試注三「暮秋左相府東三

条第守庚申同賦池水浮明月詩」の「蓮府」の語釈参照。

◎善根〓仏教語。善い果報を得るための善行。ここでは「蓮」の縁語的な

修辞。「殖諸善根」〔法華経〕從地湧出品〕「知汝花中殖善根」〔本朝

麗藻〕卷下「石山寺小池蓮」源為憲「和漢朗詠集」卷上「蓮」所収

◎孫弘閣〓「漢書。公孫弘為丞相、開東閣、以招賢人。後封平津侯。丞相

封侯、自弘而始也」〔真福寺宝生院藏本「蒙求」四九〇「漢相東閣」七

「七言。秋夜陪右親衛員外丞相亭子守庚申同賦秋情月露深詩一首」の「東閣」の語釈参照。

◎呂望家||周文王の政治を助けた。太公望呂尚のこと。二十九「七言冬日登天台山即事」の「類周文之遇師父」の語釈参照。

◎后房||きささきの局。後宮。道長の女彰子は、長保元年(九九九)十一月七日に一条天皇の女御となり、翌二年二月二十五日に中宮となった。

△「日本紀略」、「御堂閔白記」等「長保初年開后房 寛弘類歲誕親王」△「江吏部集」卷中「長保寛弘之間天下幸甚。老儒不堪傾感聊述所懷」

◎法華||法華經のこと。道長は長保四年(一〇〇二)からほぼ毎年五月に自邸で法華三十講を開催していた。十二「今年四月一日陰雨……」の

「法華三十講」の語釈参照。
◎薰入||仏教語。香の香りが自然に染みつくように、習慣によって自然に染みつく行い、教え。薰習、薰修に同じ。

◎累葉||累代に同じ。四「七言 歳暮於藤少侯書齋守庚申同賦明月照積雪」の「累葉」の語釈参照。

◎照臨||天子が天下を治めること。君臨に同じ。「明明上天 照臨下土」

△「詩経」小雅「小明」△
◎昭教||明らかな教え

◎鬢上霜||鬢に生えた白髪を霜にたとえる。「真娘墓頭春草碧 心奴鬢上秋霜白」△「白氏文集」一三〇四「寄李蘇州。兼示楊瓊」△

◎寛弘三年秋||匡衡が皇子誕生について何らかの預言をしたと考えられる

が未詳。

【通釈】

夏の夜、みなで「池台即事」の詩を作る。左大臣の仰せに従う

常に式部省員外の職に居り

長く大臣道長様の善根の場(法華八講の会場)に侍ってきた

道長様は、漢の公孫弘のように月の光の下この池台に多くの賢者をお集めになり

代々、太公望呂尚のように皇后を入内させ政治を補佐なさってきた

これらはまさに、道長様が長年法華講を開いてこられた信仰の力であつて、子孫が天子となって天下を治めていかれることであろう

私たちも詩をよみ礼拝することによって仏の教えを明らかにすれば鬢に生えた白髪を次第に忘れ、老いの憂いもなくなっていくのである

(寛弘三年の秋に申し上げたことは正しかった。そこでこの句を献じたのである。)

四十三 秋日東閣林亭即事[★] 應教

春花榮耀去年序

〔東三条花宴献序。〕

春花の榮耀 去年の序

〔東三条花宴に序を献ず。〕

講席之間愚息举周補侍中。

講席の間愚息举周侍中に補せら

父子拝舞」

る父子拝舞す。」

秋月清吟今夜詩

秋月の清吟 今夜の詩

吳坂嘶風増価馬

吳坂 風に嘶き 価を増す馬

廬江抔浪浴恩龜

廬江 浪に抔ちて 恩に浴す龜

北堂累代三余学

北堂 累代 三余の学

東閣長男一卷師

東閣 長男 一卷の師

即事寧非稽古力

即事 寧ぞ稽古の力に非ざらんや

弥寛老志待殊私

弥いよ老志を寛ろげ殊私を待たん

【校異】

教一ナシ (東A) 周一用〔ミセケチシテ周ト傍書〕(東A) 嘶一斯(鳥)

抔一持 (陽、静、内A、東A、鳥、神、京) 一持〔ミセケチシテ抔ト傍

書〕(静) 浴一洛(東A、陽、神、祐) 一洛〔ミセケチ〕山 洛〔ミセケ

チシテ浴ト傍書〕(静) 恩一愚(陽、東A、京、山、祐、神) 一愚〔恩ト

傍書〕(静) 閣一閣(東A、京) 古一右(陽) 一右〔ミセケチシテ古ト

傍書〕(東A) 志一忠〔ミセケチシテ志ト傍書〕(内A)

【押韻】上平声支韻

○○○××○○×

○○○××○○○

○×○○×○○×

○○○×○○○○

×○○×○○○×
○○○×○○××
○×○○×××○
○○×××○○○

【制作年代】

寛弘四年九月二十三日。「九月廿三日、丙戌、作文。題林亭即事」〔御
堂関白記〕寛弘四年九月二十三日条〕「九月廿三日、丙戌。参内、参左府、
有作文事。依忌月不作」〔権記〕寛弘四年九月二十三日条〕

【語釈】

◎春花榮耀去年序 寛弘三年三月四日、東三条第の花宴。藤原忠輔が「度
水落花舞」の詩題を献じ、匡衡が序者となった。序がすぐれていたの
息子举周が蔵人に補されたことは、「御堂関白記」に見える。「三月四日
丙午、天皇自東三条遷御一条院、中宮同行啓。是日也、天皇先於東三条
殿命花宴。題云、度水落花舞」〔日本紀略〕寛弘三年三月四日条〕「三
月四日……参著後、承仰権中納言(忠輔) 献題、渡水落花舞。奏聞後、
聞人付韻字、軽字。召匡衡朝臣賜題、仰可献序由。……取文台、講文講
書、序宜作□、仍序者男举周、被補蔵人了……」〔御堂関白記〕寛弘三
年三月四日条〕

◎吳坂 吳城の北にあったという坂。値を増す馬とは、千里を走る名馬で
ありながらその価値を知られず塩車を牽かされていた馬が、吳坂で伯樂
に遭い、不遇を訴えて鳴いた故事。「昔驥驥倚於吳坂、長鳴於良樂〔善口、

戦国策、楚客謂春申君、昔騏驎駕塩車、上呉坂、遷延負轅而不能進、遭

伯樂仰而鳴、之知伯樂知己也」〔古文選〕卷二五「答盧書」劉琨（現
行の「戦国策」楚策「孝烈王」に同様の話を載せるが、呉坂の語は無い。）

○廬江二川の名。『史記』「龜策列伝」に廬江から神龜が出現した記事が載
る。「廬江、出三天子郡入江」〔山海経〕海内東経「神龜出於江水中。

廬江郡常歲時生龜、長尺二寸者二十枚、輸太卜官」〔史記〕「龜策列
伝」

○井浪二井は喜びのあまり手で打つこと。浪を打ち叩く。蓬萊山を背負う
大龜が手を打って舞うことが楚辞「天問」に見える。「鼈戴山抃 何以安

之」〔楚辞〕「天問」第五段「神龜抃舞 背負靈嶽」〔晋書〕樂志
下

○北堂二大学寮の文章院。大学寮の中でも北側にあつたのでいう。「式部少
輔紀長谷雄者、北堂文選講説未畢、諸道学生、課試有員」〔菅家文章〕

卷九「請令議者反覆檢稅使可否狀」

○三余二学問をするための三つのあまりの時間。歳の余である冬、日の
余である夜、時の余である陰雨の三つ。暇を見つけては学問をすること。

【蒙求】五四九「董遇三余」の故事。「魏略曰、董遇、字季真、善左氏伝。

從学者云、苦渴无日。遇云、当以三余。或問三余意。遇言、冬者歲之余、
夜者日之余、陰雨月之余也」〔真福寺宝生院藏本「蒙求」五四九「董遇

三余」

○東閣二前漢の公孫弘が賢者を集めるために開いた閣。五「八月十五夜陪

員外藤納言書閣同賦月照牖前竹応教」の「公孫弘曰」の語釈参照。

○長男二卷師二匡衡は頼通の侍読であつたことが、「二中曆」に見える。

「宇治殿（如正 江匡衡丹波守江時棟（大学頭）藤有俊（書始）」〔二中
曆〕第二「儒者職」○撰関侍読「一卷師」は前漢の張良が老人から授

けられた太公の兵法を高祖に教えた「蒙求」「張良取履」で知られる故事
により、王者、権力者の師となること。「漢書、張良、字子房、祖開地父

平、皆韓相。良少時從容遊於下邳圯上。有一老父衣褐。至良所、直墜其
履圯下。謂良曰、孺子取履。良愕然欲歐之、為其老、強取之。因跪進父、

父以足受之、笑去里所復還曰、孺子可教矣。乃授良大兵法曰、讀此可
為王者師」〔真福寺宝生院藏本「蒙求」五二八「張良取履」〕「良数以大

公兵法説沛公」〔史記〕「留侯世家列伝」〔子房為一卷之師、万戸豊大
其賞〕〔本朝文粹〕卷六「申美濃守狀」大江匡衡〕匡衡の詩文に張良の故

事が頻出することは、後藤昭雄「大江匡衡の詩文」〔平安朝漢文学論者〕
（初出は「語文研究」三二―三三号）にくわしい。

○稽古二力二古をかながえ究める、すなわち学問をすること。学問の努力。
十七「暮春応製」の「稽古力」の語釈参照。

【通釈】

秋の日、左大臣様の林亭で即事の詩を作る。左大臣様の仰せに
よつての作

昨年二の春は花の宴の序を作り榮譽を得た

〔東三条第での花の宴で序者の栄を賜った。披講の間、息子拳

周が蔵人に補せられ、親子二代の榮譽に拝舞したのである。〕

今年の秋は明月の下、詩を作り吟ずるのである

吟詠の声は、かつて呉の坂で己の価値を認めてもらおうと嘶いた馬のようでもあり

天下が治まったしるしに廬江に出現した亀が、天子の恩を喜んで浪を打った音のようでもある

大江家は大学寮の文章院で代々学問を修めてきた

また、私は左大臣様のご長男をお教えしてきた

今日仰せによって即事の詩を作ること、また、これまでの学問の力はないか

いっそう老いの心をくつろげて左大臣様の格別のお引き立てを待とう

(平成十七年五月十日受理)